

人工内耳装用生徒の進路課題に対する自信

○杉中拓央 (早稲田大学人間科学学術院) 齋藤友介 (大東文化大学文学部教育学科) 河野淳 (東京医科大学病院)
 KEY WORDS: 人工内耳 進路課題 キャリア発達

(目的)

わが国の人工内耳(以下、CI)装用児においては、1994年の保険適用や1998年の適応基準の設定を背景として、植え込み手術を受けた者が、近年では後期学齢期の年齢を迎えている。しかし、こうしたCI装用児の青年期に対するキャリア心理学的な検討は十分になされておらず、彼らの今後の社会生活の質的な向上を考えると、その実態を明らかにすることは重要である。既に、職業興味を介したキャリア発達に関する検討により、CI生徒では聴者に比して企業的職域への興味が低いことや、聴覚障害に起因する志望職種に揺らぎが存在すること、一貫性を欠いた将来展望があることを報告した(杉中ほか, 2017)。他方、彼らの進路課題に対する自信や自己効力の状況の詳細や、関連する変数の検討は行われていない。具体的には、どのような背景を有する生徒に対して、どういったキャリア発達上の支援が求められるのか、探索していくことが求められる。

上記の背景を踏まえ、本稿では、CI生徒に対して、進路課題に対する心理尺度による紙筆検査を実施、報告する。

(方法)

対象: A 大学病院において聴覚管理を行うCI装用児者のうち、調査時点で中学校及び高校生54名を対象とした。性別による内訳は男性が36名、女性が18名であった。被教育歴による内訳は統合教育群が25名、特別支援学校(聴覚障害、以下ろう学校)群が29名であった。また、CI装用閾値は $M=25.1\text{dB}(SD=5.9\text{dB})$ 、語音明瞭度は $M=85.4\%(SD=15.3\%)$ であった。対象者の年齢は、そのキャリアを連続体として捉え、誕生日から調査日時時点までの日齢に換算した $M=5662.2\text{日}(SD=591.8\text{日})$ 。なお、本研究は、人に対する研究にかかる倫理的配慮の下に実施した。

紙筆検査: 進路選択に対する自己効力感の測定を行うために、坂柳・清水(1990)の進路課題自信尺度(12項目)を用いた。本尺度は、調査時点における個々の進路選択課題に対する自信の程度を、進路選択に対する自己効力感として操作的に捉えて測定するものであり(矢田・吉中, 2014)、学生の進路に対する自己効力感を「教育的」「職業的」「人生的」進路課題の3側面、各4項目から評価する。

項目内容は教育的進路課題「進学先を決めるのに必要な情報・資料を自分で集めること」「進学のための目標や計画をはっきりと立てること」「自分に合う進学先を決めること」「進学した後、充実した学生生活を送ること」、職業的進路課題「希望する職業を決めるのに必要な情報・資料を自分で集めること」「希望する職業を実現するための目標や計画をはっきりと立てること」「自分に合う職業を決めること」「就職した後、充実した職業生活を送ること」、人生的進路課題「人生や生き方を知るために必要な情報・資料を自分で集めること」「人生での目標や計画をはっきりと立てること」「自分の人生や生き方を決めること」「充実した幸福な人生を送ること」であった。回答は、それぞれ「自信がある」「やや自信がある」「どちらでもない」「あまり自信がない」「自信がない」の5件法で回答してもらった。

本尺度の採用理由は、既に坂柳・清水(1990)において信頼性と妥当性が確認されており、かつ、少項目のため実

表1 3課題に対する自信の被教育歴間比較(Mean±SD)

	中学校(n=28)		高校(n=26)	
	統合(n=12)	ろう(n=16)	統合(n=13)	ろう(n=13)
教育	14.3±3.5	13.8±4.2	12.7±3.4	15.2±1.9
職業	13.9±3.3	12.1±4.4	12.3±3.3	15.1±2.8
人生	14.7±3.5	13.1±4.6	12.4±2.4	15.8±2.3

施容易性にすぐれていることによる。

分析: 被教育歴間(統合教育群、聾学校群)の比較にウェルチ検定及びサンプルサイズの影響を受けない効果量(Cohenのr)の算出を行った。また、尺度得点とデモグラフィックな諸変数の関連について、無相関検定を行った。(結果)

まず、各進路課題について、Cronbachの α 係数により内部一貫性を検討したところ「教育的課題」が $\alpha=.865$ 、「職業的課題」が $\alpha=.858$ 、「人生的課題」が $\alpha=.873$ といずれも十分に高い値であったため、それぞれの項目点を加算し合成得点を求めた。各課題領域の得点は、の「教育的課題」が $M=14(SD=3.3)$ 、「職業的課題」が $M=13.3(SD=3.7)$ 、「人生的課題」が $M=13.91(SD=3.59)$ であった。

次いで、被教育歴による群間比較(表1)を行ったところ、中学校においては、いずれの課題においても有意差は確認されず、効果量についても、その影響をほとんど認めなかった。高校においては、いずれの課題領域に対する自信も、ろう学校群が統合教育群のそれよりも有意に高かった。「教育的」($p<.01$ Cohen's $r=.50$)、「職業的」($p<.01$ Cohen's $r=.43$)「人生的」($p<.01$ Cohen's $r=.60$)。

さらに、母相関係数の無相関検定の結果、語音明瞭度と職業的課題自信($p<.05$ $r=.29$)、人生的課題自信($p<.05$ $r=.32$)の間にそれぞれ正相関を認めた。日齢や性差、学年、装用閾値、構音との関連は認めなかった。

(考察)

高校段階において3つの全進路課題の領域で成績差が示された理由については、ろう学校の職業教育の効果や、統合教育におけるCI児に対する支援の不十分さが仮説として挙げられよう。他方、中・高の段階間ではサンプルが対応せず、縦断的検討ではない点に留意する必要がある。

また、課題への自信と語音明瞭度との間に正相関が認められた。本稿のサンプルでは、語音明瞭度と被ろう教育歴との間に負相関があり、これらを踏まえれば、統合教育において問題を抱える一部の児の深刻さが浮上する。

(謝辞)

本研究はJSPS科研費(16K04846)の助成を受けた。

(文献)

- 坂柳・清水(1990) 中学生の進路課題自信度と性役割自己概念との関連. 進路指導研究. 12, 18-27.
 杉中・齋藤・河野・白井・富澤・野波・塚原(2017) 人工内耳を装用する聴覚障害生徒の職業興味に関する検討. AUDIOLOGY JAPAN. 60(2), 129-135.
 矢田・吉中(2014) 中学生の時間的展望と進路選択自己効力. 弘前大学教育学部紀要. 111, 149-155.
 (SUGINAKA Takuo, SAITO Yusuke, KAWANO Atsushi)